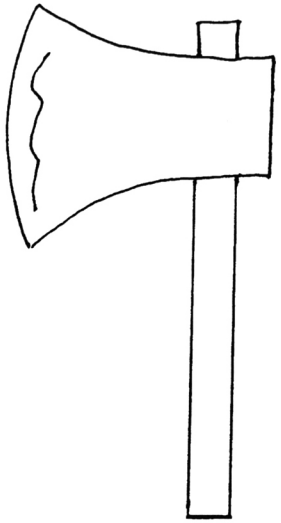
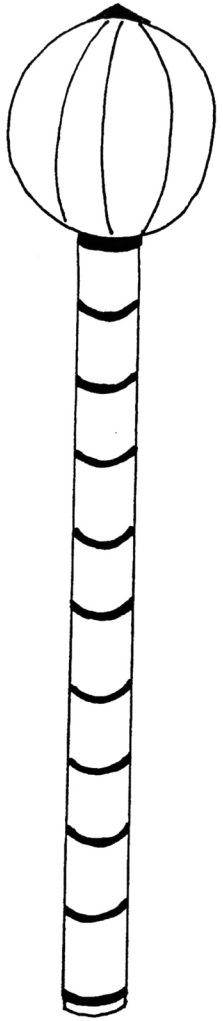
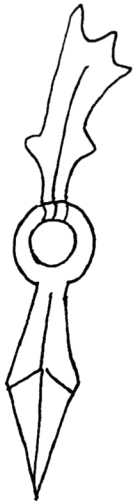
朴刀



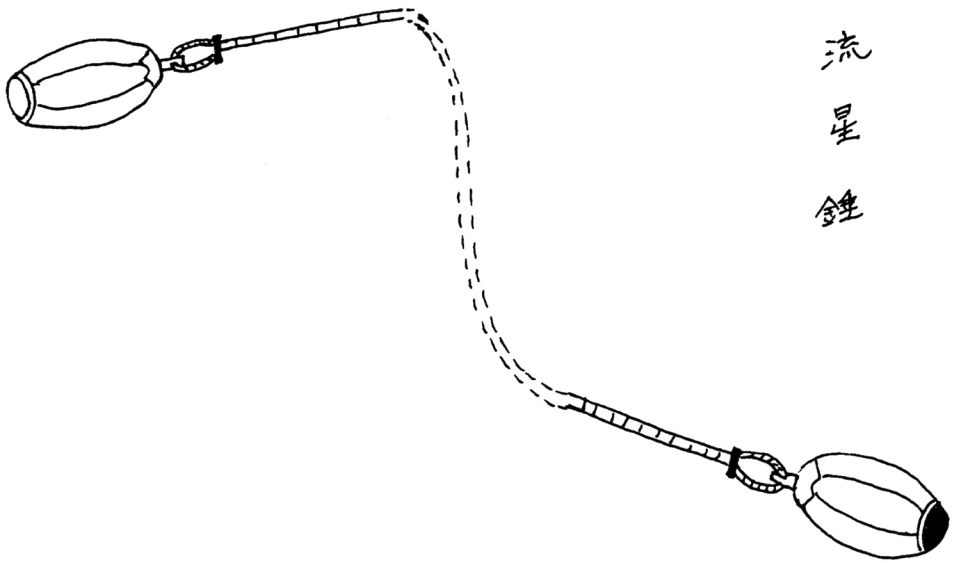
板斧



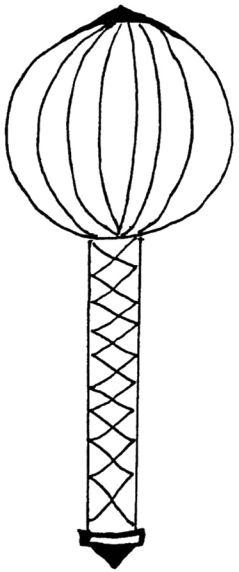
骨朵



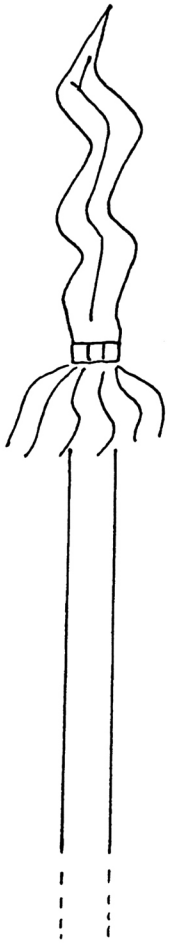
飛鏢



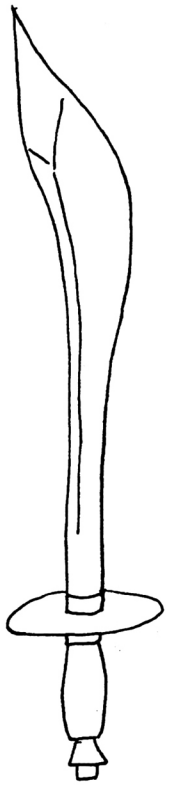
流星錘



錘



蛇矛



柳葉刀

1－1 ②

一

かすかに風が吹いていた。

軽く片頬を撫で、風は踊るように汾水の水面をすり抜けていく。春の柔らかな光を浴びて、雪華は生きることの喜びを身体中で感じていた。

方四里※ほどのささやかな草原ではあるが、雪華にとっては、ここほど落ち着ける場所はなかった。そしてここは、父との思い出の場所でもある。宋家村から汾水の左岸にあたるこの草原まで、父は幼い自分を連れて、何度も足を運んだものだった。それが、今ではとても懐かしく感じられる。※一里は約五百メートル

流れに沿って延びる街道との間には、鬱蒼と繁る木々が広がり、汾水のきらめきを隠している。村の人々があまり訪れることのないこの草原を、雪華は輝水の庭と名づけていた。

ここで、父は様々なことを語ってくれた。学問のこと、農のこと、商のこと、果ては、人は何のために生きるのかまで。幼い雪華にはむずかしすぎる話ばかりだったが、その時の、父の真摯なまなざしだけは心の中に焼きついている。こうしておだやなか初春の陽射しを浴びていると、あの時の父の声さえ聞こえてきそうだった。

「やっぱり、ここが一番好き」

雪華は、口に出して呟いていた。誰もいないこの草原で、一人心の羽を伸ばす。そのことが、雪華のひそかな楽しみになっていた。

母の思い出はほとんどない。二人目の子を産んだあと、血を失いすぎて亡くなったと、父からは聞かされていた。優しい女性だったという。村の人々は、今でも母を慕っているようだった。

それが、時として雪華を苦しめることもあった。母を知る人は、どうしても雪華の中に母を見ようとする。美しい女性だったという。幼い頃から、母に生き写しだと言われてきた。父に訊いたが、ただ笑って、勁い人だったと言った。そう言った時の父の目は、誇らしそうに

も哀しそうにも見えた。
たまらないな、と思った。母はもういない。声すら、顔すら憶えていない。母が亡くなったのは、自分が一歳の時なのだ。そして、一つ違いの弟も、間もなく流行り病で亡くなった。誰もが母のおもかげを心の中に持ち続けている。その重さに、時として押し潰されそうになる自分を感じた。父は、そんな雪華の心に気づいていたのか、おまえはおまえだ、他の誰とも代わることのできない大切な娘なのだと言ってくれた。そして、不器用そうに微笑むのだった。その父の笑顔も、すでに遠いものになってしまった。
左手の木立から、枯れ枝を踏みしだく音が聞こえた。振り返ると、木立の奥から小山のように大きな男が姿を現した。色黒の、四十少し過ぎに見える男だった。
「無用(むよう)……」
雪華が呟いた。
「嬢さん、ここにいたか。捜しましたぞ」
無用と呼ばれた男が言った。大きいだけでなく、岩のように頑丈そうな身体だった。
「たまに来るの。ここに来れば、嫌なことも忘れられるわ」
「ここじゃないかと思ったのは、あちこち捜し回ったあとのことだ。とんだ遠回りをしてしまったな」
「伍小母(ごおば)さんにも言ってなかったから」
「ここで何を」
無用が訝(いぶか)しげな顔をした。こんな何もないところで。そう顔に画いてある。
「ここには、わたしの大切な思い出があるの」
雪華が、遠くを見るような目をして言った。
「思い出……」
「父の」
「ああ、宋江(そうこう)様の」
無用は、それでも納得しかねる様子だった。

「三年前の秋……」
雪華は言葉をつまらせた。
三年前、雪華が十五の年に、村が賊に襲われた。突然のことだった。収穫を祝う秋祭りの日、三十人ほどの賊が村を襲ったのだった。祭りの準備で、男達の半数が村を空けていた。その隙を、賊に狙われた。
「賊に襲われたのでしたな」
ぽつりと、無用が言う。
「ええ。思い出したくなくても、心の中から離れないの」
それまでも、近くの山に立てこもっていた数十人の賊が、近隣の村を襲うことはあった。
しかし、人の命を奪うことまではしない。賊の中には、苛酷な税に耐えかねて、心ならずも身を堕とした者が多かった。だから村人も、出来る限り賊の求めに応じてきた。見知った顔を見つけた時には、粟や麦だけでなく、銭まで与える村人もあった。
だが、三年前の賊は違った 。村人を襲うのに何のためらいも見せなかった。祭りで賑わっている最中、突然馬蹄(ばてい)の音が響き、瞬く間に村は蹂躙された。恐ろしいほどの馬の速さだった。
「宋江様は、その時……」
無用が、慰めるような口ぶりで言う。
「ええ」
隠れろ。悲鳴のような父の声を聞いた。怒号と馬のいななきが響き渡る中、それは、不思議なほど鮮やかに雪華の耳に届いた。そして、それが父の声を聞いた最後だった。
「あの時は……」
どうしても思い出してしまう。まるで昨日のことのように、あの時の記憶が甦る。
悲鳴を上げて逃げまどう子供達を、雪華は必死に捜し続けた。十人、それが限界だった。
泣き叫ぶ子供達を励まし、蹲って歩けない子を背負いながら、雪華は、逃れられそうな道を捜した。広場には土煙が舞い上がり、まるで竜巻

のように家々を襲っていた。
視界のほとんどきかない中で、雪華は懸命に逃げ道を捜した。賊は、抵抗する村人をあらかた殺し終え、手当たり次第に家に押し入り略奪をはじめた。村の中心の広場から、女の悲鳴が上がった。雪華に機織を教えてくれた、柴小母さんの声だった。槍に身体を貫かれながら、それでも必死に訴えていた。子供達だけは見逃しておくれ。幽かにそう聞こえた。激烈な怒りが、身体の奥底から湧き上がって来た。おまえ達を殺したい。雪華の瞳は憎悪で染まった。
突然、声のようなものが聞こえた。東の道。声はそう告げていた。優しい女の声。遠い昔どこかで聞いたような、そんな不思議な懐かしさを感じた。嘘のように、怒りと憎しみは消え去っていた。雪華は村の東に目をやった。道がある。細い道だが、それは確かに東の森へと続いている。幼い頃、木の実を採りによく通った道だった。阿鼻叫喚の地獄絵の中で、その道は一条の光のように輝いて見えた。
「嬢さん、どうした」
無用が心配そうに訊いた。雪華は答えない。
道は民家の裏手にあり、賊からは見えにくい位置にあった。行けるか。しかし、民家の裏に回るには、どうしても賊のいる広場を横切らなくてはならない。広場を避け、南へ大きく迂回することも出来るが、子供の足では耐えられそうになかった。何よりも、南には身を隠すものがない。一人でなら。雪華の顎から汗が滴り落ちた。雪華は頭を振った。
一人で逃げるなんて出来ない。いや、してはいけない。父の隠れろという言葉は、雪華だけに発せられたものではなかったはずだ。子供達を助け、賊の手から逃れよ。雪華の胸にはそう響いた。この子達を見捨てるなんて出来ない。
出来ることは……。雪華の心は決まった。自分が囮になる。賊の目を引き付け、その間に子供達を東の民家へ逃がす。これしかない。幸い、逃れた子供達の中に石勇がいる。村一番の悪童で、石将軍などと自称しているが、その心根は優しい。雪華は、背負っていた子を後ろ

の石勇に託した。石勇は、自分より年上の女の子を背負うと、痛いほどの視線で雪華を見つめた。十三にしては身体が大きく、膂力も子供とは思えないほどの強さだった。

三歳で父を亡くし、十歳からは病がちな母を助け、大人に交じって働いていた。頑健な身体を持ち、力仕事も厭わなかったので、木を伐ることにかけては村でも指折りの存在にまでなった。だが、それが大人達の妬みをかい、いやがらせがはじまった。迫害が母に及んだ時、石勇は弾(はじ)けた。いやがらせを続けた三人の大人を、素手で叩きのめし、一人ずつ麻縄で木にしばりつけたのだった。三人が縄を解かれたのは、翌日の昼になってからだった。この騒動を境に、大人達は石勇を避けだし、悪童と呼ぶようになった。石勇のほうも、大人達との関わりを絶ち、一人で木を伐り生活するようになった。それが、石勇の心身を強靭なものにした。

石勇の母が病で亡くなったのは半年ほど前のことで、弔いは、雪華を含めごく少人数の子供達だけで行った。雪華は、石勇を乱暴者だとは思わなかった。早くに失くした父の代わりに、精一杯母を助けたかったのだろう。雪華は石勇の心の奥底に、まだ磨かれずにいる玉のような光を感じていた。

雪華は石勇の目を見た。

わたしが引き付ける。その間に……

突然、賊達の間に動揺が走った。賊の一人が、糸が切れたように倒れ込むのが見えた。仰向けに倒れた賊の眉間に、何かが突き立っていた。飛鏢(ひひょう)。尾には青い布。父の飛鏢。また一人、賊が倒れた。賊達の怒号が聞こえて来た。二人、ほとんど同時に顔に突き立っていた。父はまだ生きている。生きて闘っている。私が囮になる。今のうちに逃げよ。父の声が聞こえて来るようだった。

雪華は、力尽きて蹲っている女の子を抱き上げると、隠れていた民家を飛び出した。東の民家までおよそ五十歩。その間、身を隠せそうなものは何もなかった。一気に駆けた。一瞬息が止まり、目の前が白くなった。抱いている子を守るように、背中から倒れ込んだ。

抜け切った。
雪華は広場に目をやった。賊達は民家の一つに群がっている。弓に矢をつがえている賊もいた。雪華達が隠れている民家から、七軒ほど北の民家だった。あの中に父がいる。胸が締めつけられるように痛んだ。
西の民家に目を向けた。子供達が次々と駆け抜けて来る。子供達をすべて送り終え、石勇も女の子を背負ったまま走り抜けて来た。皆、汗と土にまみれていたが、雪華の目を真剣に見つめ返している。雪華を先頭に、子供達は民家の裏を抜け、東の森へ続く小道を目指した。
止まれと、
声がした。
賊が二人、棍のような武器を手に、森の奥から飛び出して来た。雪華はその武器に見覚えがあった。骨朶(こつだ)。契丹人(きったんじん)の武器だ。賊は笑いながら近づいて来た。
ほお……。こりゃあ別嬪だ
右の賊が呟いた。
ああ、高く売れそうだ。この餓鬼どももいい値で売れそうだぜ。こんな森ん中見張らせられて、とんだ貧乏くじ引かされたってくさってたんだが、お宝が転がり込んでくるとはな
そう言って、左の賊が下卑た笑いを浮かべた。
疵つけんなよ。とくに顔はな
右の賊が足を踏み出した。
雪華は、抱いていた女の子を下ろした。そのまま、裙(くん)※の右裾に手をやった。雪華の右手の中で、何かが光った。ほとんど同時に、右の賊が膝を折った。賊の左目に、深々と飛鏢が突き立っていた。
左の賊が、一瞬気を呑まれたように後退したが、すぐに雪華の頭上に骨桧を振り下ろした。雪華は、子供を庇いつつ左にかわした。次はかわせそうにない。かわせばこの子が危ない。※裙　スカート
突然、賊の身体が後ろに飛んだ。石勇だった。仰向けに倒れた賊の両肩に、すばやく膝を伸せ、丸太のような両腕を賊の首に交差させた。

水の中で石を砕いたような嫌な音がし
た。賊は二・三度手足を震わせ、割れた横笛に似た呼気を残して動かなくなった。
雪華は、賊の左目に突き立っている飛鏢を見つめた。尾に白い布がついている。雪華の飛鏢だ。賊の胸は動きを止めていた。白い布は、半ばまで赤い血で染まっていた。
人を殺めた。雪華は両手で顔を覆った。涙が視界を滲ませた。子供達を救うためとはいえ、自らを守るためとはいえ、わたしは人を殺めた。雪華は、自分の掌が血に染まっていくように感じた。そしてこの汚れは、もう二度と落ちないもののように感じた。掌だけではない。心こそが血で汚れたのだ。二度ともとの自分には戻れない。雪華は呆然と立ち尽くした。
後ろから肩をつかまれた。石勇だった。
俺が二人を殺した。そういうことです
そう言って、庇うように雪華の右に立った。
雪華お姉ちゃん……
抱いていた女の子の掌が、いたわるように雪華の手を包んだ。

「あれは、曹瑛の手……」
雪華は汾水の流れに目をやった。あれから三年。だが、心はまだ疼いている。

つないだ手の温もりは、今でも雪華の掌を暖めている。あの子達がいてくれたから、わたしは闇に堕ちずに済んだ。雪華は心からそう思った。石勇のぎこちない優しさも、崩れかかった雪華の心を支えてくれた。
あの時逃れた十人の子供達のうち、五人が親類縁者に引き取られていった。親を失くし、頼れる先のない残りの五人は、石勇を除いて雪華と暮らしはじめた。男の子が聞起と陳統、女の子が黄玉と曹瑛だった。村が襲われた日、祭りの準備で男達の半数が山に入っていた。賊

はそこを狙ったのだろうが、男手が残ったことで、村は一年ほどで立ち直った。だが、村に残っていた男達は、村長である保正（ほせい）の父をはじめ全員が殺された。逃げ遅れた子供達、そして女達も、柴小母さんを含め何人も殺された。村の悲しみは、けして今でも癒えてはいない。

どうしてもと懇願され、やむなく雪華は父の跡を継いだ。昨年の秋だった。祖父から父、父から自分へと受け継がれた飛鏢の武技もあった。父は剣にもすぐれ、雪華も幼い頃から剣を教えられてきた。だが、それを使うことはないだろうと思っていた。いや、そう思いたかったのだ。武技など好きではなかった。父に教えられ、いやいや鍛錬してきただけだった。その武技に助けられた。武技を鍛錬してきた、そのつらい時間に助けられた。あの時飛鏢を飛ばさなければ、今の自分達はなかった。いかに石勇といえども、武器を持った賊二人を、素手で短時間に倒すことは難しかっただろう。人など殺したくはなかった。だが、あの掌の温もりを失いたくなかった。後悔などしていない。賊は人ではなかったのだ。雪華はそう思うことにしていた。

「嬢さん……」

無用の声が聞こえる。雪華は我に返った。忌まわしい思い出から、ようやく現実の陽光の中に戻った。

「嬢さん、思い出していたのか」

優しい声だった。こんな時、無用はあまり話さない。ただじっと待っている。

「ええ。でも、大丈夫。もう三年も経つのですもの」

雪華が笑いながら答えた。作り笑顔と分かるかしら。

父が死んだあの日から三月ほど経った雪の夜に、無用は村にやって来た。民家の戸を叩き、村に置いてくれと言ったのだった。村人に呼ばれ、雪華が無用と話すことになった。

無用という名だ

と言った。

食料が尽きかけ、雪を避けるところもない。行くあてもないので、

できることなら置いてはもらえまいか。そう言って、雪華の目を見つめた。

哀しい目の色だ。無用を見て、雪華が最初に感じたことだった。きっと何か傷ましいことがあって、それをずっと耐え続けてきた目だ。そしてそれは、わたしと同じ色なのだろう。岩のように大きく、鉄のように頑丈そうな身体つきだったが、不思議に威圧感は感じなかった。見かけは異なるが、どこかしら、父に通じる懐かしい匂いを感じた。あまり時をかけずに、いいでしょう、と言っていた。今思うと、なぜあんなに安易に承諾したのか不思議になるが、あの時は、そうしなければならないと思ったのだった。その後の無用の働きは、雪華の期待を遥かに超えるものだった。

「何かあったの」

「そうそう、嬢さん。館に遼兵が来ておる」

「まだ辰※牌なのに。こんなに早く、何の用でしょう。それに、遼の兵士は知らないわ」

※辰牌　午前八時頃

「嬢さんが知らなくても、向こうは知っておるかもしれん。嬢さん、権場で厄介ごとにでも巻き込まれんでしたか。最近揉め事が多いと聞いてますがな」

朔州の権場に行ったのは、雪がまだ残る一月ほど前のことだった。雪華はそこで、絹三百匹と麦などの穀物を売った。しかし、村の産物を売ることは、雪華の仕事としては小さなものにすぎない。

あの壊滅的な打撃から、一日でも早く村を復興させるために、雪華は遼との交易をはじめた。必要とされる物を必要とするところに運ぶ、そのことが大きな利を生むことを雪華は知っていた。調達先は、その物を必要としないところ。それを徹底すれば、利はさらに大きなものになった。そのために最も重要なのは情報だった。物をただ動かすだけなら、大商人には敵わない。しかし、時間の速さ、正確さ、そして物の質と値、ここにはまだ入り込む余地があった。雪華のもくろみは当たった。あの時ともに逃げ、今も雪華と行動をともにする五人の子供達が立派に成長し、今では雪華の仕事の中心的役割を担っていた。

雪華が背負い、次いで石勇に託した黄玉は、朔州に留まり様々な情報を集めている。女ながら武技が好きで、雪華に習い、特に剣の才に恵まれている。雪華にとって黄玉は、恩ある柴小母さんの娘だった。遼にある朔州にやりたくはなかったが、黄玉は自ら朔州行きを希望した。遼にいれば、母を殺した賊一味の手懸りを得られるかもしれない。黄玉はそう考えたのかもしれなかった。美しい娘になったのに、心に剣を呑んでいる。雪華にはそう感じられる時がある。

雪華の手を包んだ女の子、曹瑛は太原府にいる。遼で売る物を調達したり、その逆に遼で買いつけた物を売ったりしている。おっとりと優しそうな外見に似ず、曹瑛は機敏な娘だった。村の娘にしては珍しく、書を読むことも文を書くことも出来る。勘定も速く正確だった。太原府に置いておくにはうってつけの娘だ。それに太原府は、宋家村から百里ほどしか離れていない。汾水沿いに歩けば、一日で行くことも出来る。馬を使えば、一日での往復も可能な距離だ。太原府が、雪華達の交易の拠点だった。

男の子の一人、聞起は新城、広信軍、そして遼のかなり内に入った振武軍の榷場※を回っていた。馬が好きで、一日に五百里も駆けたことがあった。馬を潰すことなく十五の若者が五百里を駆けた。その噂は太原府にまで届き、聞起の名は広く知られるところとなった。時には馬と寝起きをともにし、馬と心を通わせているようだった。駄馬と思われた馬でさえ、聞起が乗ると見違えるほど駆けた。聞起はその卓越した機動力で、遼の情報を集めている。宋国境に近い朔州にいる黄玉、そしてこの聞起が、遼における情報源だった。

※榷場　交易場

もう一人の男の子、陳統は宋内の麟州の榷場にいる。麟州は西夏との交易の場だった。陳統の母が西夏の出だったので、陳統も西夏の言葉をあやつれる。雪華達がここに進出したのは一年前だったが、開封府から遠い京兆府には大商人が少ないため、今では稼ぎ頭にまでなっている。陳統は身体こそ小さいものの、目端がきき機を読むのに長けていたので、武を重んじ荒っぽい気性の残る西夏人とも、うまく折り合

いをつけていた。陳統自身は武人になりたいという希望を持っているようだが、武以外の才の方が豊かそうだった。身が軽く、猿のように枝から枝へ飛び移ることが出来た。登れそうにない岩山にも駆けるように登って行き、垂直な岩壁も素手で登ることが出来た。軍に入ったとしても、偵察に向きそうだ。武人というなら黄玉の方がよほど武人らしかった。実際、拳も剣も、黄玉には到底及ばない。

「いえ、揉め事があったとは聞いていません。朔州では黄玉に会いましたが、別段変わりはないようでした。相変わらず、会うたびに剣の相手をしてくれとせがまれましたが」

「黄玉らしくていいじゃないですか。で、腕の方は」

「強くなりました。受けるので精一杯でした。もう、黄玉には敵いません。剣に習熟するには刀の何倍もの時が必要と言われていますが、黄玉には生来の才があるのでしょう。修練も欠かせていないようですし」

「黄玉には天賦の才がありましたな。儂が教えていた時も、驚くほど鋭い剣尖の冴えを見せましたから。聞起の方はいかがでしたか」

「黄玉の話では、春いっぱいは広信軍にいるそうです。何か気にかかることがあるのかもしれないと、黄玉が言っていました」

「広信軍といえば宋側の権場ですな。また役人どもが、いちゃもんをつけて余計な税でも掠め取っておるのでしょう。あそこは、軍も役人も腐ってますからな」

そう言って、無用は汾水の流れに目を遣った。

「知っているのですか」

無用が広信軍にいたことがあるとは聞いていなかった。もっとも、無用の過去などほとんど聞いていない。無用も、自らのことを語ることはない。雪華は、詮索しようとは思わなかった。これまでの無用を見て、十分信頼に足るということが分かっていた。それだけでいいと雪華は思っている。

「いえ、行ったことはないですが、そういう話を聞いたことがある」

無用にしては力ない返事だ。

「いいわ。いずれにしても、黄玉や聞起には関わりないでしょう。陳統は麟州にいるはずですし」
どう考えても思い当たらない。
「あんまり待たせない方がいいですぞ」
「無用は会ったのですか」
「どんな用なのかは訊いときましたが」
無用の顔つきからすると、どうやら聞き出せなかったらしい。あまり例のないことだった。
「分かりました。戻りましょう」
雪華は無用に頷くと、左の木立に向かった。
二人は森を抜ける小道を歩き、宋家村に続く道に出た。残月(ざんげつ)が見えた。残月も、雪華をみとめて嬉しそうに首を振った。三歳の牡馬だった。あの惨劇の翌年、聞起が西夏の牧から連れてきた馬だった。雪華が、村の労役用に何頭か買うようにと、聞起にかなりの銀を持たせたのだった。一月後、聞起は一頭の馬に乗って戻ってきた。雪華は呆れて、たった一頭、と聞起に訊いた。聞起は誇らしげに胸を張り、こんないい馬はいない、万馬に一馬の掘り出しものだと言った。そして、この馬は雪華姉ちゃんに乗ってもらうんだと言い張った。こんなに走れる馬は滅多にいない、それに頭もいいんだと聞起が微笑んだ。こいつがいれば、今度賊に襲われても逃げられる。俺は、雪華姉ちゃんに死んでほしくないんだ。
聞起の言葉に、雪華は思わず抱きしめた。一人で逃げるなんて出来ないわ。でも、その気持ちはもらっておくわ、と言った。雪華はその馬を残月と名づけ、以来、姉弟のように過ごしてきた。聞起が見込んだだけあって、残月は素晴しい馬に育ち、かけがえのない友となった。

「何人来ているのです」
残月に跨(またが)り、雪華が訊いた。
「二人でしたな。兵ではなく将校、いや将軍かもしれん」
「そんな方がなぜ……」

「先触れの兵が二人来たんですが……」
無用は、言い難そうに雪華から目を逸らせた。
「やってしまったのですか」
「殺しちゃおりません。賊の変わり身かもしれんと思ってちいと訊いてみただけです」
「無用のちいとはきついですから」
無用は苦笑いした。
「急ぎましょう。村を荒らされてはたまりませんから」

ほどなく館に着いた。門をくぐった。石勇が見える。口から血を流し、顔を張らせて座り込んでいた。石勇の前に、二人の男が立っている。大きな男達だった。筋肉で肩が盛り上がり、腕の太さも木の幹ほどある。無用にひけをとらないな。そう雪華は思った。二人並んで立っているところは、あたかも阿吽(あうん)の仁王像を思わせる。
左手の錘(すい)を持った男が、雪華をみとめて微笑んだ。邪気のない、引き込まれるような微笑だった。右に立つ、弓を持った男の表情に変化はなかった。どことなく似ている。兄弟なのかもしれないと雪華は思った。
「なぜ石勇が……」
雪華が無用に訊いた。
「儂が嬢さんを捜しに出た後に来たんでしょうな。誰か館の者が石勇を呼んだんでしょう。
石勇の奴、嬢さんの指示も待たずに追い払おうとしたらしい」
無用は憮然とした表情を見せた。
「大した怪我ではなさそうです。さっきわたしの方を見ましたが、すぐに下を向きました。
恥ずかしいのでしょう。無用に仕置きされた後もあんなふうでした」
「そんなこともありましたな。ですがあの時の仕置きは、ほんとにちいとだけだ」
「無用のちいとは、わたしも遠慮しておきます」

雪華と無用は、石勇を庇うように男達の前に馬を進めた。錘を持った男が雪華の瞳を覗き込んだ。嫌な印象は受けなかった。むしろ、その巨体から滲み出る圧倒的な気の力に好ましいものを覚えた。

「阿骨打(あくだ)という。完顔阿骨打(わんやん)。遼軍にいるが、契丹人(きったんじん)ではない。女真人(じょしんじん)だ。隣にいるのは弟の呉乞買(うきまい)」

親しみのこもった声音だった。太くてよく通る声だが威圧感はない。

「わたしは宋雪華。若輩ながら父宋江の跡を継ぎ、この村の保正を努めさせてもらっています。何か御用でしょうか」

阿骨打は雪華の声を聞いて、ふと、初霜の降りた草原を思い浮かべた。思っていた以上の娘だ。阿骨打は心の中で快哉を上げた。

「この者が何か無礼でも」

雪華はそう言って石勇を見た。石勇は恥ずかしそうに俯いたままだ。

「いや、これは失礼した。儂らは怪しい者ではないと言ったのだが、聞いてはくれなかった。心ならずもかようなことになってしまった。無作法の段は謝罪する。許されよ」

そう言って、阿骨打は漢人のように礼を執った。

「おそらく真でありましょう。この者は少し拙速のきらいがありますから。お連れのお二人にもご迷惑をおかけしました。直ちにいましめを解き、お渡しいたします」

雪華は無用に目で合図した。無用は馬首を返して左の廂房(しょうぼう)に向かった。ほどなく二人の遼兵を連れて戻って来た。馬は置いてきたようだった。遼兵に目立った傷はない。

「お二人には大変失礼をしきした。お許しください」

雪華とともに無用も叩頭した。

「これといった傷は見えんな。やはりおぬし、大した腕だ」

そう言って、阿骨打は無用を見つめた。

「ここでは話もしかねます。どうぞこちらへ」

雪華は残月から降り、接待場所である前庁(ぜんちょう)へと向かった。無用も、阿骨打と呉乞買をうながし雪華の後に続いた。

前庁に入ると、雪華は二人に凳(とう)※を勧め、自分も凳に腰掛けた。無

用は雪華の右手に立ち、二人の挙動を見逃すまいとしている。

※凳　背もたれのある椅子

「用件は何でしょうか。遼の将軍が、こんな田舎に何をしに来られたのですか」

雪華が訊いた。

「いや、格別用件があって来たというわけではない。しいて言えば、宋雪華、おまえと話がしたいと思って来たのだ」

「わたしと話が……。こんな田舎娘と」

「そうだ、まさしくおまえとだ」

阿骨打は、そう言って雪華に笑いかけた。その屈託のない笑顔につられて、雪華も思わず笑いそうになった。こんな小さな村の、保正とはいえまだ十八の娘でしかない自分に、大遼の将軍らしき男が会いに来たというのだ。馬鹿馬鹿しくて笑ってしまいそうだった。

「わたしはただの村娘です。保正といっても、役所に認められたものではありません。村人に推されただけです。わたし自身、村を治めることが出来るなどとは思っていません。

ただ、村にとってよい方策はないかと日々考えているだけです」

「随分と成功しておるではないか。三年前のことは知っておる。悲しいことであったろう。

だがおまえは、こんなに早く宋家村を立て直した。大した力量と言わねばなるまい。こんな乱れた世だ、おまえ達には気の毒だが、賊に襲われたなぞという話は掃いて捨てるほどある。村人すべてを殺されたという話も珍しくはない。だがな、この村ほど早く立ち直ったところはない。いや、以前よりも遥かに賑わっておるそうではないか」

確かに人は増えた。雪華が太原府や近隣の県に行き、仕事にあぶれた者達を呼び寄せ、村の再建に一役かってもらったのだった。当然村人からの反発はあった。余所者を入れるな。特に年長者からそうした声が上がった。雪華は挫けなかった。必要のあるところに、必要のないところから移してくる。それは交易にも通じる雪華の理念だった。仕事にあぶれていた者達は、見違えるように働いた。壊された民家は

建て直され、荒らされた畑も元に戻り、使えなくなった井戸も復旧した。そしてその頃には、村人もすっかり余所者を受け入れていた。彼らも村に馴染み、中には村の娘と結ばれる者もいた。必要とされる。そんな些細なことこそが、彼らにとって最も大切なことだったのだと雪華は思った。

「皆の努力のおかげです。わたしの力ではありません」

「そうか。遼との交易はどうだ。おまえの発案であろう。かなりの利を上げているようではないか。いや、責めているのではない。むしろ感心しておるのだ」

「無用、お湯を」

雪華は無用に言うと、桌の上に茶器を並べた。

「すまぬな。ちょうど喉が渇いていたところだ。遠慮なくいただこう」

湯が用意されると、阿骨打は一気に飲み干した。熱い湯ではないが、水の方がよかったかもしれないと雪華は思った。弟の呉乞買は、黙ったまま湯にも手をつけない。

「宋でははじめに湯を出すのであったな。遼でははじめに茶を出す。遼は宋と変わらなくなったと思っておったが、こういうところは違うのだな。やはり、一つになるというのは無理なようだな」

「澶淵の盟以来百余年。宋も遼も変わったのでしょうが、それぞれの人の在りようまでは、そう簡単に変わるはずもありません」

「そんなものだろう。確かに、遼は武力では宋を圧倒した。宋は貢物である歳幣を遼に貢ぎ、建前だけは兄となって生き延びた。だが傍目には、宋は遼の属国のようにしか見えん。

だがな、今の遼を見ていると、皇帝をはじめ高官、軍人まですっかり宋に染まっておる。本当に勝ったのはどちらなのだろうな」

「勝ち負けなどにこだわる必要はありません。民が満ち足りた暮らしが出来るかどうかが大切なのだと思います。国は、帝や官吏のものではないはずです。遼に貢いでいる銀二十万両、絹十万匹の歳幣にしても、民からの税によって購っているのです」

「しかし、戦よりはましであろう。ひとたび戦が起きれば、民なぞひ

とたまりもなかろう」
「戦は最も忌むべきものです。ですが過酷すぎる税も、戦と同じように、いえ、時には戦以上に民を滅ぼします」
「ほう、戦以上にか」
「特に、心を」
「なるほど。働けど働けど奪われ続けていれば、確かに心も挫けよう」
「そして、生きる意味さえ失います。戦でなら、またやり直すことも出来ます。もちろん死者を甦らせることは出来ませんが、それでも生き残った者達は復興に務めます。この宋家村のように」
「おまえは遼と交易しておるが、この村を襲ったのは遼兵だろう。いや、だったと言うべきか。おまえの父は一人で十人もの遼兵を倒したが、多勢に無勢で殺されたと聞いた。遼が憎くはないのか」
雪華はつかの間目を閉じた。父は命をかけて闘った。理不尽な凶行に対して敢然と立ち向かった。たとえ力尽きて倒れようとも、逃げずに立ち向かったその心こそが雪華の誇りだった。
「憎んではいます。ですがそれは、遼の民にではありません。どんな国にも民はいます。いえ、民こそ国なのです。麦を育て、絹を織り、鉄を鍛え、そして明日のことを考える。そうした民の暮らしの積み重ねが、国であり人の歴史であるはずです。民ということにおいて、遼も宋も変わりはないのです。そしてわたしは、民に幸せになってほしいのです。民こそ幸せになるべきなのです。何も育てず、何も作らない帝や官吏に幸せになる権利はありません。自ら額に汗した者だけが、幸(さち)を得ることが出来るのだと思います。だからわたしは、遼とも西夏とも交易をしています。それが民の暮らしに役立つと思うからです」
「権場でのおまえの評判はよい。早く正確で、何より利を貪らぬとな。遼の商人は、競っておまえと取引をしたがっておる。だが、おまえの方でそれを断っておるとも聞いた」
「わたしは民のために、そして自分達のためにしているのです。確かに、わたし達から買い、それを今までと同じ値で売れば、利は大きくなるでしょう。ですが、わたし達はそんなことを望んではいません。

そうした利だけを追う者とは、今後も取引をするつもりはありません。遼の商人の多くは漢人です。わたし達は、彼らの行いも調べています」
「そのための聞起か」
阿骨打はそう言うと、軽く頷いて見せた。
「聞起を知っておられるのですか」
雪華は、この男がどこまで自分達のことを知っているのだろうと思った。
「何度も会っておる。知り合いというより、そうよな、友と呼ぶべきか。遼内を駆け巡り、なおかつあれだけ見事な乗り手だ。嫌でも人目につく。おまえ達のことも聞起に聞いた。それで儂は、宋雪華、おまえに会いに来た。是非ともおまえに会わねばならぬ。そう思って儂はここまで来たのだ」
雪華の瞳を覗く阿骨打の目は真剣だった。
「聞起の仕事の一部と思ってください。あれは遼の言葉も分かりますし、何よりも馬が好きなのです」
「遼の言葉はおまえに教えてもらったと言っておったぞ。儂は、聞起から様々なことを教えてもらった。宋のこと、交易のこと、そして宋から見た遼のこともな。外から見た遼の弱点なぞ、なかなか感心させられたわい。聞起からは、代わりに武技を教えてくれと言われたのでな、流星錘を教えておいた。儂は弓と錘が得手だが、聞起の身体では使いこなせぬだろうと思ってな。飲み込みが早いので教え甲斐があったわ。もう相当に使えるぞ。武技の上では儂が師だが、交易のことでは聞起が師だ。だから友なのだ。もっとも、儂も遼の軍人だ。そんなことをおおっぴらに遼内では出来ん。それで、監視の緩い宋側の広信軍でしておった。」
雪華は黄玉の言葉を思い出した。広信軍にいる。聞起の居場所を、黄玉はそう言っていた。こういうことだったのだ。何か気になることがあるらしい。そうも黄玉は言っていた。
聞起は黄玉に隠したかったのだろう。負けず嫌いなあの二人らしい。
雪華は心の中で微笑んだ。と同時に、阿骨打に対する警戒も急速に薄

らいでいった。阿骨打は、年若い聞起のことを友と呼んでくれた。それが雪華には嬉しかった。

「聞起の友でしたら、わたし達の友でもあります」

「そうか、友と呼んでくれるか。儂は黄玉という娘のことも聞いておる。大した綺麗な娘らしいが、剣のことしか頭になく、おまけに雪華姉ちゃんの言うことしかきかない頑固者だと言っておったわ。聞起は鉄面女と綽名しておったが、真にそのような娘なのか」

雪華は思わず笑ってしまった。黄玉には可哀そうだが、確かに一片の真実を衝いている。

あれだけ美しい娘だ、言い寄って来る男達は掃いて捨てるほどいる。しかし、その誰もが痛烈な拒絶に遭っていた。もう少し優しく断りなさい。そう言ってきかせるのだが、一向に直る気配は見えない。なるほど鉄面女とは、聞起もうまくつけたものだ。

「どうでしょうか。聞起も本気で言ったわけではないと思いますが」

「無用とやら、おぬしはどう思う。この宋雪華も美しい娘ではないか。儂なぞ年甲斐もなくときめいてしまうぞ。おぬしの目から見てどうだ」

いきなり話を振られて、無用は少し戸惑ったような顔をした。阿骨打達に対する警戒は消えている。

「嬢さんと黄玉か……。強いて言えば、美しさの質が違うといったところか。儂は嬢さんの方がと思うが、黄玉の方と言う者もおるだろう。譬えて言えばそうさな、嬢さんは春、黄玉は冬の美しさといったところか」

「いい譬えだ。何となく、分かる気がする」

雪華はうんざりしてきた。

「そんな他愛のない話をしに来たのではありませんでしょう。用件を言ってください」

「おお、それもそうだ。当人の前で品定めなど、無礼千万であったわ。許されよ」

「聞起の友と言われるのですから、出来る限りのことはさせていただきます。交易のことでしょうか」

「そうだな、単刀直入に頼んだ方がよいようだな。宋雪華、おまえの力を貸してほしい」
雪華は驚いた。遼の、それもひとかどの将とおぼしき男から、いきなり力を貸してほしいと言われたのだ。驚くなという方が無理だ。
「力を貸せと言われましても、わたしには何の力もありません。何か誤解なさっているようです。わたしは、十八のただの田舎娘です。」
「いや、儂は聞起と会い、おまえのことを知り、儂なりに調べたのだ。そして、今こうしておまえに頭を下げておる。漢人の故事にある、三顧の礼を執ってもおまえに助力してもらいたい」
「そう言われましても、どのようなことをなさりたいのかも分かりませんし、おそらくわたしなどでは何の役にも立たないでしょう」
「はじめて会って言うのも何だが、儂はおまえが信に足る者だと思っておる」
阿骨打はそう言うと、後ろに立つ呉乞買を一瞥した。呉乞買は、そこまで話しますかというような顔をした。
「宋雪華。儂はまずおまえに謝りたい。さきほど儂は、これといった用件はなく、ただ話をしに来たのだと言ったが、それはおまえが凡庸な娘だったらのことだった。だが、おまえは優れた智と勇を持つ素晴しい娘だ。儂はどうしてもおまえの力を借りたい」
「無用をはずしますか」
「いや、いい。むしろ聞いてもらいたい」
無用は二つ凳を持って来て、一つを呉乞買に勧め、もう一つには自分が腰を下ろした。
「儂は、遼軍の南枢密院に属する女真部隊長を務めておる。儂がおよそ一万、弟の呉乞買が五千の女真兵を率いておる。おまえ達はよく知らんだろうが、北枢密院は契丹人の、南枢密院はそれ以外の部族や漢人居留地の統制が任務だ。契丹人同士やその他の部族、そして漢人の間でも、今や争い事などほとんどない。問題は国境周辺なのだ。遼・宋を問わず、賊や軍隊崩れ、果ては食い詰め農民、浮浪児集団までもが集まって、さながら無法地帯となっておる。おまえ達を襲ったのも、

遼軍の脱走兵達だ」
「それは分かっていました。あの時わたしは、賊が手にしていた武器を見ました。遼兵の使うものでした」
「代州の守りが失われたのだ。この村が襲われた半年前、代州の通判が替わったのだ。知州※が大人しいのをいいことに、賄賂を搾り取り、代州のみならず近隣の県や村にも不当な税を押し付けた。それだけでも十分だが、こいつは賊や遼兵崩れにまで、銭さえ出せば国境を行き来出来るようにしてしまった。その頃、代州国境を守っておったのは呼延灼だった。おまえも呼延灼の名くらいは聞いておろう」

※知州　州の知事

「双鞭を執っては天下無敵と言われている、あの呼延灼将軍ですね」
「そうだ、その双鞭呼延灼だ。儂は何度も呼延灼に会っておる。文弱な宋にあってあれほどの武人を儂は他に知らん。武だけではない男だ。心根もしっかりしておる。兵にも慕われておった。儂より年下ではあったが、儂は呼延灼を尊敬しておった」
「分かりました。その新任の通判※と呼延灼将軍がぶつかったのですね」

※通判　副知事。中央から派遣され、知事を監視もする

「そうだ。そして呼延灼は更迭された。秦鳳路の蘭州にだ。西夏国境の僻遠の地だ。通判の項新という男は、宦官の楊戩とつながっておる。呼延灼を飛ばすのなぞわけもないことだったろう。一年ほどは蘭州にいたはずだ。おそらく、西夏の騎馬戦でも学んでいたのだろう。呼延灼は騎馬の戦いに長けていたからの。個の武も目覚しいが、騎馬戦こそ呼延灼の真骨頂だろう。同じ兵数なら遼なぞ足元にも及ばん。西夏でさえ勝てん。儂ら女真の騎馬隊に匹敵するだろう。なにしろたった三千の兵で代州雁門関を守り抜いたのだ。しかも、騎馬は五百でだ。まさに精鋭中の精鋭と言ってよい。この騎馬隊は、呼延灼とともに蘭州に行ったらしい。呼延灼の後釜に座ったのが、王堅という楊戩子飼いの将軍だ。項新と王堅、この二人が代州を牛耳ってから、おまえ達の村のような悲劇があちこちで起きるようになったのだ」
「そうでしたか。そこまでの情報は、わたし達もつかんでいませんで

した。わたし達の直接の仇は賊に堕ちた遼兵ですが、宋という国の在りようも無関係ではなかったのですね」
「その通りだ。おまえ達の国が、自国の民を守るという最低限の役目を果たしていれば、あのような悲劇は起こらなかっただろう。少なくとも、呼延灼がおればな」
雪華は、両の拳を握り締め、何も言わずに俯いている。無用は雪華に声をかけようとしたが、腕を組んで凳に座り直した。
「呼延灼が去って儂らも忙しくなった。項新と王堅は、こともあろうに代州国境の守備を遼に任せたのだ。もちろん、多大な賄賂を使ってだ。本来遼では、国境の警備は北枢密院統軍司の管轄だが、実際は儂ら女真族や漢人の部隊が当たらせられておる。契丹人は、もう馬に乗ることも厭っておる。漢人にしても、そんな労多く益少ない仕事を嫌って賄賂を使って避けようとする。奴らは商いがうまく銭を持っておるからな。結局馬鹿をみるのは、賄賂となるものを持たぬ儂らだ。国境警備のほとんどを、儂ら女真族が担当することになった。今日は西、明日は東の日々だった。だが、悪いことばかりではなかった。こうした移動と賊との闘争は、必然的に儂らを鍛えていった。結束力も高まっていった。儂ら女真族は、もとは隋の靺鞨から出ておる。それが黒水靺鞨と粟末靺鞨に分かれ、粟末靺鞨が渤海国を創った。儂ら完顔部は黒水靺鞨の出で、渤海国に加えられた。しかし渤海国も遼に滅ぼされ、黒水靺鞨はやむなく遼に降った。この後、黒水靺鞨の南におった者達は遼に取り入り遼人として生きる道を選び、北に住む儂らとは道を違えた。遼人となった者達を熟女真、儂ら女真として生きる者達を生女真という。遼は大国だ。遼人となった熟女真は豊かになり、もう儂らのことなぞ忘れておるわ。儂らは遼の戸籍もなく、厄介な仕事を押し付けられてはおるが、女真族としての誇りは失っておらん。熟女真の奴らは儂ら生女真を笑っておるが、馬にも満足に乗れなくなった熟女真に、女真族の復興など出来はせん。儂らこそ、その願いを叶えるのだ」
阿骨打はそう言って、右の拳で桌を叩いた。生女真は、長くつらい

思いをしてきたのだろう。雪華は、精気に溢れた阿骨打の瞳の奥に、言い知れぬ哀しみを見たような気がした。

「それで将軍は、女真の復興を果たそうとしているのですか」

「儂らはずっと機をうかがっておった。遼の貴族は鷹狩りに目がない。いかによい鷹を手に入れるかが、奴らの最大の関心事なのだ。そこで奴らは、渤海の北に棲む海東青（かいとうせい）のことを知った。この海東青という鷹は、なりは小さいが俊敏で、獲物に対する粘りも抜群なのだ。鷹狩りにはうってつけだ。奴らは血眼（ちまなこ）になって海東青を求めた。儂ら生女真に、海東青の捕獲命令が下った。もちろん、熟女真にも海東青を献上せよとの命は下った。だが、熟女真には遼とのつながりもあるし銭もある。結局、すべて儂ら生女真がかぶることになった。海東青はな、高い崖の中ほどに棲みついておるのだ。上から降りても下から登っても、いずれにせよ命がけの仕事だった。十回のうち一回成功すればいい方だ。百・千の数で若い命が失われた。それも、貴族達の遊びのためにな。報酬は一切ない。奴らにとっては献上だからな。遼の恩に対して、儂らがすべき当然の奉公なのだそうだ。もう我慢も限界に達しておる。これまで日和見（ひよりみ）を決め込んでおった部族の長老達も、さすがに反対しなくなった。遼から独立する。今がその機なのだ」

阿骨打の瞳は燃え上がるようだった。雪華はその炎に撃たれ、しばし呆然と阿骨打を見つめていた。

「儂は慎重に準備を進めてきた。ことさら、遼に忠義を尽くしているように見せかけた。一族の者でも、このことを知っておるのはこの呉乞買を含め数人だけだ。遼に覚られる懸念は、まだない」

「大変な覚悟でおられることは分かりました。ですが、将軍の兵と弟様の兵をあわせても一万五千。これで遼に立ち向かえますか。遼は百万と豪語する兵を有しています」

「勝ち負けは、兵の数だけで決まるものではない。一万五千は騎馬精鋭部隊の数だ。他の生女真で戦う意志を明らかにしておる者は二万以上にのぼる。女真族は女も馬に乗り弓を引く。へたな男よりよほど頼りになる。熟女真の中にも不満を持つ者はおる。儂らが立ち上がれば、

そうした者達も黙ってはおるまい。もろろん、皆には詳しいことは話しておらぬ。だが、種は蒔き終わりつつある。後もう少しなのだ」
雪華は阿骨打の顔がまばゆいように感じた。勝ち目の薄い戦いを、それでも怯まず挑もうとしている。雪華には、父宋江の想いが阿骨打の言葉に重なるように思えた。
「それで、わたし達に何を期待しておられるのですか」
「儂はそうしたなかで聞起に会い、様々なことを教わった。遼兵百万と言われておるが、その半数は漢人で、ただしかたなく従っているだけで戦意も忠誠心もないとな。遼軍で手強いのは、中枢を護る宮廷衛兵隊と地方部族の一部だけで、あわせて五万に満たぬともな。聞起に教わったことだ。儂らは遼軍におるが、いつも国境に遣られてそうしたことは見え難いのだ。今の儂らにとって何が足りないのか。それは情報なのだ。それも、儂ら女真人だけの判断ではなく、漢人さらには契丹人の考えも取り入れたうえでの情報だ。そして、もたらされた情報を的確に分析する必要もある。そのようなことは、儂ら女真人には荷が重い。儂らの頭は戦いには向いておるが、物事を正確に判断するようには出来ておらん。こういうことには、漢人が最も優れておる。それで儂は、儂らの気持ちを分かってくれ、信頼のおけそうな漢人を探しておったのだ。聞起に出会い儂は、それがおまえ達であると確信したのだ」
雪華は当惑を隠せなかった。出来るなら、目の前の阿骨打という将軍に手を貸してやりたい。父の想いと重なるということもあるが、それ以上に阿骨打の真摯さが雪華の胸を打った。だが、どう考えても自分達に出来そうなことはない。
「わたし達は、無用を入れても七人しかいません。村人にはそれぞれの仕事があり、わたし達とは別です。品物の輸送はその都度人を雇っています。もちろん、信頼出来る者に限っていますが。将軍がここまで自らの心の内を語ってくださったのですから、わたしも隠し事はいたしません。聞起の他に、遼には黄玉という者がいます。聞起からお聞きになっているでしょうが、聞起と同様、遼での情報を集めていま

す。聞起と異なるのは、輸送中の危険を避けるため、国境周辺の賊や宋・遼の軍の動向にも気を配っていることです。太原府には曹瑛という者を置いています。曹瑛は、主に宋内の情報を収集し、遼との交易で何が重要かを判断したり値を決めたりしています。輸送の人員を集めるのも曹瑛の仕事です。また、金銭、物資の管理も行っています。わたし達の交易の要(かなめ)を担っています。西夏との交易には、宋側の麟州(りんしゅう)に陳統という者を置いています。一年前からはじめたのでまだ交易の量は多くありません。今は開拓中といったところです。如才ない者なので心配はないと思います。もう一人、石勇は将軍もお会いになったあの者です。村を守ろうとしたのでしょうが、失礼をいたしました。まだ十六で、思慮に欠けていたのだと思います。聞起と黄玉それに曹瑛が十七で、陳統と石勇は十六です。子供の集まりと笑わないでください。親を失くし住む家も壊されたわたし達にとっては、けして遊び事ではないのです」

「それは分かっておる。おまえ達は普通の大人達の幾倍ものはたらきをしておる。おまえ達を知る者は、誰も子供だなぞと思ってはおらん。むしろ誰もが感心しておる。おまえ達は、宋家党と呼ばれて一目置かれておるのだ。儂なぞまず、第一の宋家党信奉者だ」

阿骨打はそう言って後ろを振り向き、呉乞買に同意を求めた。苦笑を浮かべながら呉乞買は頷いた。

「将軍のお考えを理解したなどと、出すぎた事を言うつもりはありません。ですが、将軍の目指すところは戦なしでは辿り着けません。どんな事情があろうと、どんな正義を掲げようと、戦で泣くのは民なのです。将軍の語られるのを聞き、わたしも非は遼にあると思います。許してよいとは思いません。女真の方々は、長い間大変な苦労をされてきたのだと思います。遼はそれに対し、罰を受けても仕方がないとも思います。将軍、どうしても戦は避けられませんか。遼の天祚帝(てんそてい)や、中枢にいる者達だけを討つことは出来ませんか」

「出来ん。それが出来るなら、儂はここまで待たなかった。機はようやく熟したのだ。我が父劾里鉢(はりぼ)の遺志を継ぎ、今ようやく女真は遼の頚(くび)

木から解き放たれるのだ。儂らは命なぞ惜しまん。おまえの言う通り、儂らは数の上では圧倒的に不利だ。滅ぶかもしれん。だが、儂の抵抗は女真の民に語り継がれ、いつかきっと固い土を破り、芽を出すはずだ。儂らはそのための礎となる」

雪華の心は震えていた。戦は悲惨なもの。けして起こしてはならぬもの。それは正しい。しかし、この胸の震えは何だ。阿骨打の言葉に心震える、この気持ちは何だ。雪華は、その震えを抑えることが出来なかった。

「宋雪華よ。国というものは、下から創られる時と上から創られる時がある。下は民、上は覇者と言い換えてもよい。民が創る方がおそらくましなのであろう。指導する者の資質にもよるがな。指導者にその資質がないと判明したら替えることが出来る、したい者ではなくさせたい者に導いてもらう。そうしたことが出来るのなら、民も今よりは幸せになるだろう。しかしな、人の世というものは、圧倒的に覇者が国を創ってきたのだ。秦も漢も、唐も宋も、すべて覇者が興した国ではないか。おまえ達だけではない。遼にしても、覇者耶律阿保機が興した国だ。そして一つの国が滅び、一つの国が興るその分かれ道に在るものは、いつの時も戦なのだ。人というものは愚かなものでな、民の害にしかならぬ帝であっても、それに気づくことはない。はじめは聡明な帝でも、惜しみなく与えられる豪奢な生活、上辺だけの敬愛、そんなものに長く浸っておると、知らず知らずのうちに腐ってしまうものだ。腐りながら汚物を撒き散らしておるのに、自分は人を超えた天の子だと勘違いするのだ。民草はすべて、天の子である自分に、身を削って尽くすのが当然と思い込むようになる」

「それはその通りだと思います。ですが、そんな愚か者を倒すために、また民が苦しむことになるのです。わたしには納得がいきません。もちろん、女真の方々の在りようを、このままにしておいてよいというわけではありませんが。戦ではない、何か別の道はないのでしょうか」

「国の力の源は、財と兵なのだ。人は財を護るために国を守り、命を惜しむがゆえに国に従う。どちらも人の性であろう。責めることは出

来ん。しかしその財と労役が、民の苦しみのうえに築かれるものであってはならん。民の涙と命を費やしてはならん。それを糺(ただ)すために儂らは立ち上がるのだ。天祚帝一人を倒しても、代わりなぞすぐ現れる。耶律の一族を皆殺しにしたとて、甘い蜜に群がっておった輩(やから)は、どこからか帝を連れてくるか、自らが立とうとするだろう。軍の力で、反対する者を押さえつけてな。だからまず、軍を破らねばならんのだ。軍の力を失くさねばならぬ。そうすれば、虐げられていた民も立ち上がるだろう」

「立ち上がるでしょうか」

「立ち上がると信じておる。民は、ただ死にたくないからと俯いておるのではないと儂は思う。犬死にしたくないだけなのだ。もしも希望が見え、子や孫に少しでも未来が開けるのなら、命を賭して戦うと儂は思う。人が人として生きるために、今一番必要なものは希望なのだ」

「その希望を見せるのが、将軍の使命ということですね」

「そんな大仰なことではない。今まで恐れてきた遼の軍というものが、本当は張子の虎だったということを見せてやればよいのだ。そのためには緒戦だ。そこを乗り切れば、後は民がついて来るだろう」

雪華は、阿骨打が夢物語を語っているのではないと思った。阿骨打の言葉に胸の高鳴りを抑えきれない自分がいる。将軍の戦いが現実になった時、わたしのこの気持ちは、きっと何千何万の民に飛び火するだろう。そしてその先に……。

「分かりました、阿骨打将軍。この宋雪華、微力ながら手伝わせていただきます。ただ、他の者につきましては、今少し時をいただきたいと思います。一人一人の意志を確認しなくてはなりません。わたしの一存で、仲間の命運を決めるわけにはまいりません」

阿骨打が破顔した。心底嬉しそうに笑った。

「そうか、肯いてくれるか。儂はおまえと知り合えたことを生涯誇りに思う。おまえの想いも分かった。戦いは、出来る限り民を巻き込まずに行おう。もし巻き込んでしまったら、出来る限りの償いをしよう。むろん、命を償うことだけは出来んが」

「そのお気持ちがあれば、わたしも将軍についていくことが出来ます。そのお気持ち、どうかお忘れにならないでください」
「もちろんだ。おまえの心を裏切り、おまえを失うことは、儂にとって目と耳を失うよりつらい。心に刻み込んでおく」
　阿骨打に似合わぬ優しい声だった。後ろに立っていた呉乞買は、緊張が解けたかのように凳を取り寄せ兄の横に座った。
「それで将軍、わたし達はどのようなことを」
「時を知りたい。儂らが立ち上がる時を。出来れば、遼の国境で小競り合いでもあって、遼の目がそちらに向いてくれればありがたい。宋、西夏いずれの侵入でもよい。そうした事態が起こりそうならば、出来るだけ早く報せてほしいのだ。儂らでは、起こってしまった後でしか分からんのだ。おまえ達ほど情報の大切さを知っておる者はおらんからな」
「自信はありませんが留意しておきます」
「そういうことなら聞起、陳統、曹瑛といったところですかな。いや、賊に詳しい黄玉もはずせんな」
　今まで口を開かなかった無用が言った。
「無用は反対しないのですか」
「嬢さんが決めたことだ。儂に異存はない。嬢さんも、遼の横暴さは十分承知なさっているはずだ。儂は、遼などなくなってしまえばいいと思う。宋も同じですがな」
「そうですか、宋も同じですか」
　雪華は、無用の言葉に反論する気になれなかった。遼の天祚帝、宋の徽宗帝、似た者同士だった。遼は他民族には圧制をしているが、少なくとも自民族は保護している。それに比べ宋は、民から搾り取った税で自らの王朝の延命を図り、贅の限りを尽くしていた。天祚帝も贅沢好きの軟弱な天子と言われているが、徽宗帝はそれに輪かけた馬鹿天子だった。女真人は今、阿骨打という翼を得て飛び立とうとしている。雪華は羨望にも似た想いをいだいた。
「もう巳牌※を過ぎました。無用、将軍がたに茶と食事の用意を」

無用は頷き穿廊※に向かった。

※巳牌　午前十時頃　※穿廊　部屋を繋ぐ回廊

「構わんでくれ。儂らは十分に腹がくちておる。だが、喉は少々渇いておる。茶だけはいただきたい」

「遠慮なさらないでください。わたし達にしても久しぶりのお客です。粗末なものしかありませんがお笑いにならないでください」

「世話になった、宋雪華。儂はおまえと同志になれた。こんなに嬉しいことはない。そろそろ儂らも戻らねばならん。遼に黙って抜け出しておるのでな。最後に一つ願いがあるのだが」

「何でしょうか」

「おまえが飛鏢の名手であるとな、聞起から聞いておったのだ。もしよければその手並み、儂に見せてくれぬか。儂も武人のはしくれ、大いに興味がある」

「お見せするようなものではありません。座を汚すだけです」

雪華は少し聞起に腹を立てた。聞起はこんなにおしゃべりだったかしら。いや、よくしゃべるのなら陳統の方だ。阿骨打だからだろう。わたしだってはじめて会ったのに、こんなに打ち解けている。これも阿骨打の力のひとつと言えるだろう。

「いや、是非見てみたい。おまえと知り合った記念にな」

雪華は仕方なく、それではと言った。

「呉乞買様、十歩下がってわたしに矢を射かけてください」

突然言われて呉乞買は驚いた。

「矢をですか。たった十歩の距離で……。無茶です」

言い出した阿骨打はもっと驚いた。

「何を言っておる。呉乞買は女真一の弓の達者だぞ。危険すぎる。何か的になるものでも持って来てくれ。のう、無用も何とか言ってくれ」

「心配いらん。十歩あれば、嬢さんがはずすことはない」

「信じられんが仕方ない。そこまで言うなら……。呉乞買」

そう言いつつ、阿骨打は呉乞買に目配せした。呉乞買は小さく頷くと、十歩下がり矢を弓に番えた。

雪華の右腕が、優雅と見える動きで左腕に重なった。呉乞買の矢は今にも放たれようとしている。強弓だ。弓は見事なしなりを見せている。

何かが光った。ぶつんという大きな音が響いた。雪華の右腕は、もとどおり膝の上に置かれている。凳に座ったままだった。

左手にしなりを失った弓を握り、右手に下を向いた矢を持った呉乞買が、呆然として雪華を見つめている。呉乞買の斜め後ろの壁に飛鏢が突き立っている。尾に白い布。雪華の飛鏢だ。

「これは……」

阿骨打は大きな目を見開いて、そのまま黙ってしまった。

「嬢さん、珍しく弦を狙いましたな」

「ええ、呉乞買様が矢をわたしから逸らしたので」

「そうでしたか。いつもの嬢さんなら、飛んで来る矢に当てますものな」

「飛んで来る矢……いや、これはまいった。信じられん技を見せてもらった。聞起の話を遥かに超えておる。宋雪華、無礼を許してくれ。おまえに女真の護衛をつけようかと思っておったのだ。無用がついておって、百人くらいの兵なら負けぬことは分かるが、何しろ一人だ。しかし、おまえも十分すぎるほどの腕を持っておる。儂の取り越し苦労であった」

「護衛など必要ありません。これでもわたしは、荷運びの護衛についたりもするのです。護衛されるなどあべこべです」

「よく分かった。それではそろそろ去るとしよう。名残惜しいがな。こんなに心躍る出会いは生涯はじめてだった。すぐにまた会いたいのう」

阿骨打と呉乞買は、広場に繋いでいた馬に乗り、並んで雪華と無用に微笑みかけた。

「無用、いかにも偽名らしい名だ。その黒く大きな身体。かつて名を馳せた銅堤山（どうていさん）の義賊を思い起こさせる。まあ、儂にはどうでもいいこ

とだ。だが、おまえにどうしても頼んでおきたい。宋雪華を守ってくれ。どんなことがあっても、守り抜いてくれ」
「くどいぞ、阿骨打。儂は守る。命に換えてな。嬢さんは死んではならん人だ」
「無用。おまえがいかに強くとも、しょせん一人だ。せめてもう一人、おまえの代わりになる者を育てておけ。さきほどの小僧、石勇といったか、いい素質を持っておる。十六の子供がこの呉乞買を手こずらせおった。おまえが仕込めばかなりの者になると思うが」
「石勇にその気があればな。儂に異存はないが、やはり本人次第だ」
「そうさな。しかし、儂は何か嫌な予感がする。今日、話がこんなにうまく進み、満足のいく結果も得た。こんな時に大きな落とし穴があるものだ。儂の杞憂であればよいが」
「阿骨打、おまえの予感は当たるのか。おまえが心配性とも思えんが」
「ただの杞憂であってほしい」

「二人で何を話しているのですか」
雪華が訝(いぶか)しげに訊いた。
「いや、石勇を何とかしろと阿骨打に説教されていたところです」
「石勇・・・。たまに麟州まで荷を護衛してくれますが、同い年の陳統ともほとんど話をしないみたいだし。あの時は、一番頼りになる子だったのに」
「なあに甘えてるんですよ。他の四人がどんどん成長していくのを見て、取り残されたと思ってるんです」
「それだけならよいのですが」
阿骨打は帰路につこうとしていたが、思い出したように振り返った。
「そうだ、言うのを忘れるところであった。一つ土産があった。三年前この村を襲った遼の賊ども、三人を残し儂と呉乞買で討ち取った。あの遼兵どもは、もとは近衛の李集(りしゅう)の軍におったのだが、糧食を横流ししたのが発覚し逃亡しておったのだ。遼も追っ手をかけたのだが、国境を越えられたので打つ手がなかった。そのうち金と食料に窮して、

あちこちの村を襲いだしたのだ。そしてこの村を襲った。おまえの父宋江に十人倒され、はじめ三十二人いた奴らも二十二人に減った。そこで奴らは、仲間を誘いに遼に戻って来た。その途中、たまたま移動していた儂ら女真軍と出くわした。奴らが胡散臭かったので、儂は数人の兵に命じて奴らの足取りを追わせた。そうこうするうちに儂は聞起と出会い、やがてこの村の悲劇を知った。その頃はもう二年以上経っておったので、奴らの監視はしておらんかった。聞起が仇を捜しておったのは知っておったが、おまえ達が行っても返り討ちに遭うのが関の山だと思って儂は黙っておった。ほどなく奴らが五台山近くの森に隠れておることが分かり、儂と呉乞買で急襲し、三人を逃したものの討ち取った。逃げた三人は、この賊の草頭※であった阿里奇と、その二人の息子阿里塗と阿里震だった。三人の行方は正確には分からんが、三人ではもう賊は出来まい。奴らは漢人の李集の軍におった。宋の言葉に不自由せん。どこか大きな城郭にひそんでいると考えた方がよい。逃げた方角から見るとおそらく太原府、儂はそう見ておる。太原府ほどの大きな城郭になると、儂ら遼の軍人が入り込むことは出来ん。後はおまえ達の問題だ。もっとも、おまえ達の腕を知った後では、儂と呉乞買のしたことは余計なお節介だったかもしれんがな」

※草頭　賊の首領

「たった二人で賊を……。そうでしたか、本当にありがとうございます。わたし達では、賊の居場所をつきとめられなかったでしょう。これで父宋江はじめ、亡くなった村人達も浮かばれるでしょう。阿骨打将軍、呉乞買将軍には、感謝のしようがありません」

「阿里奇の長子、阿里塗の右頬には大きな赤痣がある。歳は二十三だ、見つけやすいだろう。儂の話はここまでだ。それでは宋雪華、いずれまた会おう」

二人が駆け去った後には、土煙と西に傾きかけた陽の光だけが残っていた。その少し儚げな陽だまりの中で、雪華と無用は暫し立ち尽くしたままだった。

「物見の兵達は先に戻ったのですか」
「そのようですな。儂も、四刻※ほどしか効かんように仕置きしましたからな」
※四刻　約二時間。一刻はおよそ三十分
「そうですか。可哀そうなことをしましたね」
「なあに、こっちも石勇をやられてる。あいこですな」
「それにしても、見事な将軍でした。いつの間にか同志にされてしまいました。いえ、いつの間にかなりたいと思ってしまったのです。もっと考えてからとも思ったのですが、考える間もなく決めてしまいました。こんなこともあるのですね」
「嬢さん、考え抜いて決めたことがいつも正しいとは限らん。時にはこんなふうに、考える間もなく決まってしまうこともある。そんなこともあっていい。儂なんかはそう思いますが」
「無用は面白がっているようですね」
「面白くなりそうですな。嬢さんは、こんな商人の真似事だけで終わる人じゃない。あんなにあっさり阿骨打の話に乗ったのも、嬢さんの心の中に同じ想いがあったからだと思いますがな」
「そうなのかしら。わたしはまだ世の中について、そこまで真剣に考えてなかった気がするわ」
「考えるまでもない。宋だって似たようなもんだ。徽宗の馬鹿皇帝は遼の天祚帝より始末が悪い。何が書だ、絵だ。しまいに宮城の中に山までこしらえちまって、今度は珍鳥奇獣を差し出せときた。てめえはふんぞり返って美食にあけくれ、民草が野盗に襲われ重税に苦しめられても知らん顔だ。こんな国に、いや、朝廷やそれにたかる汚吏どもに何の未練がありますかな。儂はな、嬢さん、こんな世の中、こんな朝廷をひっくり返してやりたいと思っとりました」
「物騒ですね、無用。何事にも淡々としていると思っていましたが、そんな気持ちを持っていたのですね。無用の言う通りです。わたしだって、この国を治める者達の非道さは十分感じています。このままでよいとは思っていません」
「それじゃあ嬢さん、阿骨打と同じことをはじめればいい。宋軍は遼

軍より遥かに軟弱だ。やってやれないことはないと思いますがな」
「何、らちもないことを言っているの。こんな田舎の小娘に、一体何が出来るというの。せいぜい小さな村一つを、生き延びさせるのが精一杯よ」
「ただの田舎の小娘に、こんな豊かで平穏な村を創ることなど出来んと思いますがな」
「謀反となれば、敵は軍だけではありません。この国にくまなく網を張る官吏達や、それらと結びついて財を成す商人、果ては変革を望まぬ民まで敵に回すことになるのです。そんなに簡単なことではありません」
「簡単じゃないからこそ、やりがいがあるとも言えますが」
「いずれにしても、わたしはそんな大それたことは考えていません」
「阿骨打は楽しそうでしたが」
「もともと女真族の族長だったから出来ることです。わたしは小さな村の保正に過ぎません。それに、官に認められてもいません。仲間といっても、無用を入れてたったの七人。これでそんな大きなことが出来るわけがありません」
「はじまりはいつでも一人からです。七人もいれば十分と思いますがな」
「もうその話はよしましょう。少し休みましょう」
まだ何か言いたそうにしている無用を後に、雪華は後寝(こうしん)※に向かおうとした。その時、前庁の門の陰に、男が覗き込んでいるのが見えた。見知った顔ではないように感じたが、すぐに離れて行ったので確認は出来なかった。訝しくは思ったが、少し疲れを感じていたので、そのまま雪華は後寝に向かった。
「少し休まないと」
雪華は快い疲れを感じていた。

※後寝　居間兼寝室